



## 九州・橘湾で地震活動が活発化

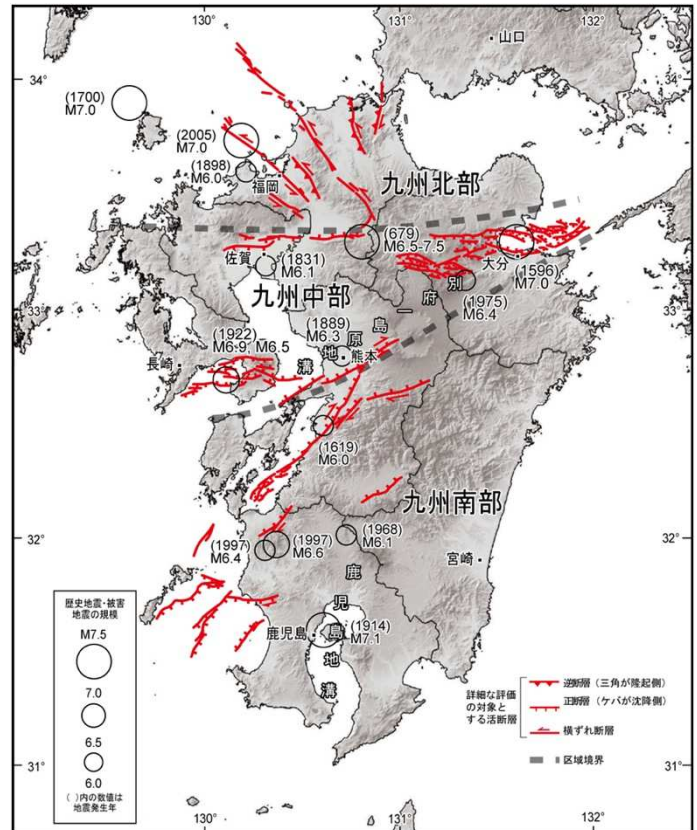
九州中部は熊本地震の発生でもわかりますように、活断層が多く存在する地域です。下の図は政府の地震調査委員会が公表している活断層分布図です。図中の赤い線が活断層です。

九州には熊本地震を引き起こした活断層だけでなく、特に「別府-島原地溝帯」と呼ばれる地域に数多くの活断層が存在しています。特に島原半島の西側に広がる橘湾にも多くの断層系が発達しています。

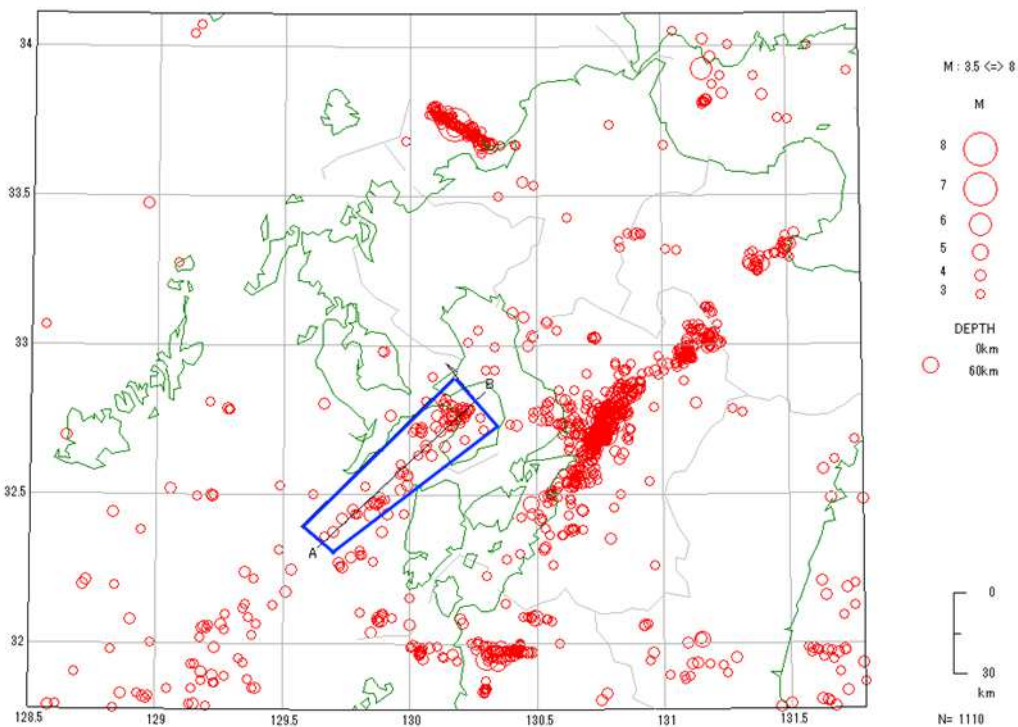
4月中旬より、この橘湾の周辺で地震活動が活発化している事がわかりました。

この地域（雲仙周辺）は熊本地震の発生後も地震活動にはほとんど影響がなかったのですが、久しぶりに中規模の地震が発生しました。

下の地震の分布図は1980年以降のマグニチュード3.5以上の地震を示したものです。今回我々が注目したのは図中の青色の四角で囲んだ地域の地震活動です。

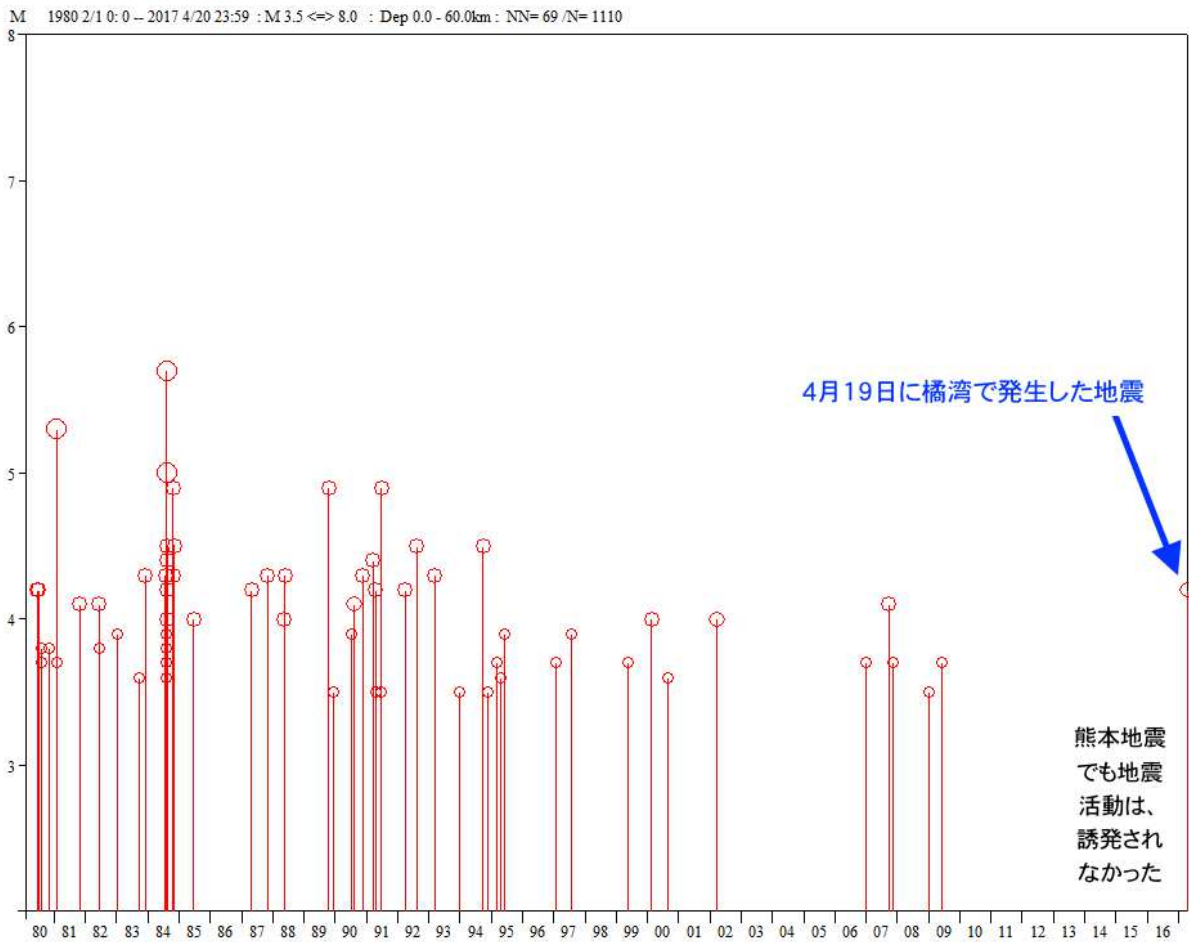


1980 2/1 0:0 -- 2017 4/20 23:59





この青色の四角で囲んだ地域の過去36年間（1980年-2017年4月）の地震活動です。縦軸がマグニチュード、横軸が時間軸となります。



上の図からもわかりますが、2010年以降、久しぶりに中規模の地震が発生したのです。特に昨年の一連の熊本地震でも、この地域の地震活動にはほとんど影響が出ていませんでした。そして近年（ここ15年ほど）は極めて地震活動が低調な状態が続いていました。

この橋湾の断層群は「雲仙断層群」と呼ばれるもので、およそ100年前の1922年には島原地震と呼ばれるマグニチュード6.9の地震が発生しています。九州は熊本地震により、大地震が誘発される可能性が高くなっている地域という事を認識して頂きたいと思います。

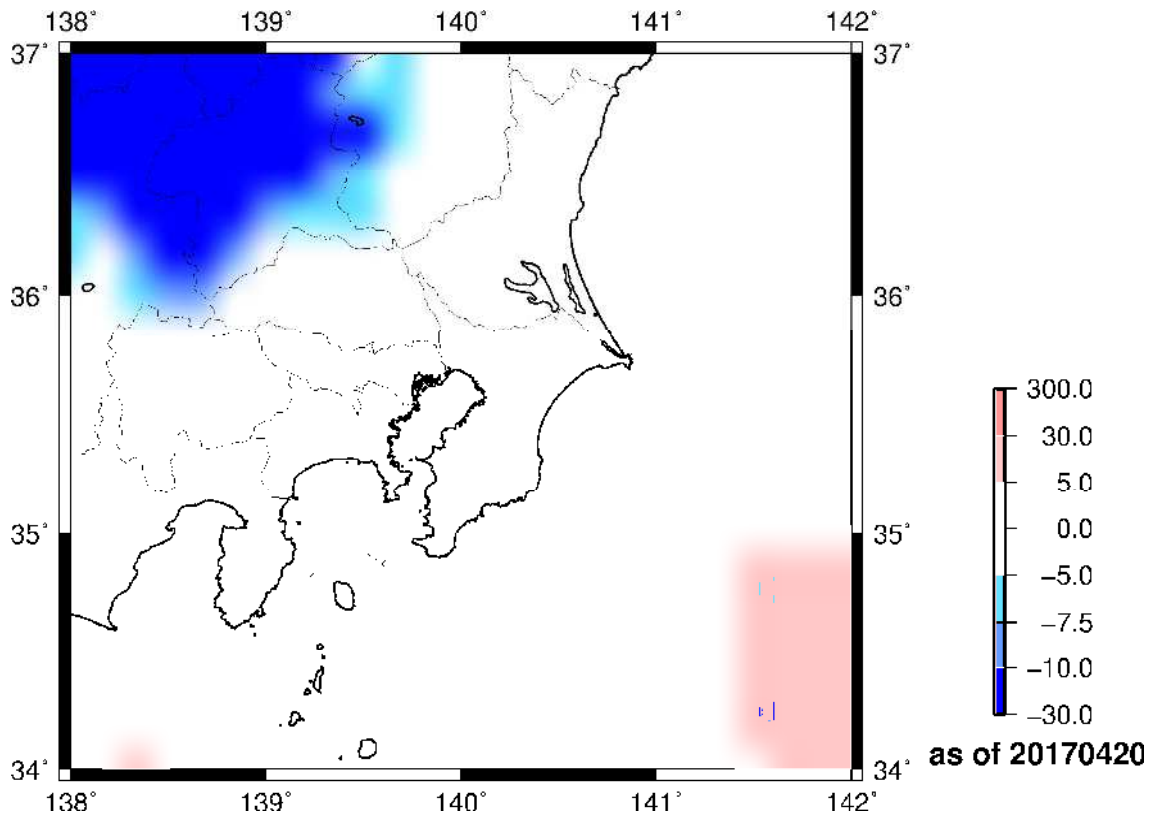
## 首都圏の地下天気図®

3月13日のニュースレターに引き続き、首都圏の4月20日時点の地下天気図です。基本的に新潟県を中心とした北信越地域の異常がこの範囲での主要な異常となります。地下天気図では異常が消えた後に地震が発生する可能性が高い事が経験的にわかっていますので、この異常がいつ消えるかが重要な意味を持っています。DuMAではこの推移に注目しています。また地震は青い色が濃い部分だけでなく、そのすぐ外側でも発生する可能性がありますので、十分注意をお願いします。

昨年12末の時点では、東京の近くにも青い異常が出現していましたが、これが消えています。解析の結果、関東地方南部（東京・埼玉・千葉・神奈川）の深さ60km程度での地震発生の可能性が高くなっています。推定されるマグニチュードは異常の最大の広がりから、最大でも6程度ですので、地震が発



生するのが深い(つまり地面から遠い)と考えられる事もあり、被害地震となる可能性は極めて低いと考えています(列車が数時間停止するといった事は発生する可能性があります)。



4月20日時点の首都圏の地下天気図。東京周辺での異常は消えている

下の図は3月13日のニュースレターでお知らせした地下天気図です。右上の昨年12月23日の時点では東京周辺でも領域は大きくはありませんが、青い異常(地震活動静穏化領域)が存在していた事がわかります。地下天気図では「異常が消えた」というのが重要な情報となります。

